

**聖書 ヨハネによる福音書10：31～42**

31 ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして、また石を取り上げた。32 すると、イエスは言われた。「わたしは、父が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中のどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」33 ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒涇したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ。」34 そこで、イエスは言われた。「あなたたちの律法に、『わたしは言う。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。35 神の言葉を受けた人たちが、『神々』と言われている。そして、聖書が廢れることはありえない。36 それなら、父から聖なる者とされて世に遣わされたわたしが、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒涇している』と言うのか。37 もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。38 しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るだろう。」39 そこでユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて去って行かれた。40 イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所に行き、そこに滞在された。41 多くの人々がイエスのもとに来て言った。「ヨハネは何のしるしも行わなかったが、彼がこの方について話したことは、すべて本当だった。」42 そこでは、多くの人々がイエスを信じた。

**説教 『私あなた方に善い業を示した』**

◆只今ご一緒に歌いました讚美歌403番の繰り返し歌われる歌詞は「やがて時は来る平和の光の くまなく世をてらす あしたは来たる」であります。これを私たちは歌ったのであります。その時は必ず来るのですが、その時が来るまでには辛い、暗い、心穏やかでない時を長く過ごさなければならぬのが、私たちの人生には必ずあります。暖かい日ばかりでなく、極寒の時もあります。晴れた日ばかりでなく、本当に曇り、風雨の激しい時もあります。未曾有の大災害に見舞われることもあります。そしてそれによって命を落とす人も少なくないのであります。そのような時、私たちはこれでも神の導きがあるのか、祝福はあるのかと、確信を失い、試練に陥ってしまうことを、私達は、これまで経験しております。そのような時、私たちはやはり神様の御言葉に立ち返ることが何よりのことだと思います。今日は壮年会で詩篇119篇を読むのですが、その105節に、これは口語訳ですが、「あなたの御言葉はわが足の灯、わが道の光です」という一節があります。どう進んでいいのかわからなくなることがあります。しかしその時にも神様の御言葉はその闇の中の足元を照らす灯と必ずなってくれます。これも私たちがこれ迄の信仰生活において経験したことであり、確信となっています。しかしそのような確信もまた揺らぐことがあるのです。それが私たちの人生だと言ってよいと思います。しかしその時に私たちは主のもとに帰るのです。御言葉に立ち返ることが何よりのことなのです。

◆牧師という務めを、私は改めて幸いな務めだと思い知らされました。というのは、この

ように主の日に御言葉を語る務めを託されております。また水曜日には祈祷会を持ち、聖書を学ぶ時を持ちます。これらは課せられた務めですから、今日は体調が悪いのでお休みさせていただきますという訳に行きません。御言葉に聞く事なしにこの務めを果たすことはできません。このように御言葉に繰り返し立ち返ることを強いられることがなければ、挫折していただろうと思います。イエス様は私達のことを本当によく知っておられる御方です。「疲れた者、重荷を負う者は誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしのくびきを負い、わたしに学びなさい。そうすればあなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」くびきに繋がれた二人は歩調を合わせないといけません。その時、強い者が弱い者に歩調を合わせるのです。イエス様という御方は、私たちの弱さを知って、歩調を合わせて下さいます。そして段々とリズムがついてきて、一人ではとてもその重荷に耐えることができない状況であっても、徐々に徐々に前に進むことができるようになります。このように招きの言葉を語ってくださるイエス様とはそういう御方であります。

◆先週水曜日の炊き出し祈祷会で、詩篇 2 3 篇を読みました。「主はわが牧者なり。われ乏しきことあらず。」これはイスラエルの全ての人の愛唱聖句です。信仰の確信を表したものです。神様は良き牧者であります。それ故に私たちは決して絶望に落ちることはありません。「死の陰の谷」を歩まなければならない。それも突然起こります。けれどもその時も「主よ、あなたが共に居てください」と歌っているのです。これは詩篇 23 篇の作者だけではなくて、信仰者すべての経験を集約している言葉だと思いますね。これを炊き出し祈祷会で諸訳を読み比べました。炊き出しは食べ物を提供する奉仕でありますけれども、その食べ物は食べたらずらにまた飢える。然し詩編 23 篇で歌われている事が、その人のものになるなら、この御言葉はその人の中で泉となって湧きあふれ、絶えることはありません。ですから私たちは食べ物を提供する奉仕を通して、主はどのような状況でも私たちと共に居て、光と命へと導いてくださいますという信仰を、このご飯に込めて提供してこそ、御心に適う炊き出しだと思いますね。そのことを互いに確認し、奉仕をしたことであります。

◆先週火曜日、キリスト教葬儀社「ライフワーク社」の若い社員の方が来られました。これまで何度かセールスに来られた方ですが、まだ2階の礼拝堂を見たことがなかったので、1時間位、丁寧に案内いたしました。この人もクリスチャンで、「とても楽しかったです」と言ってくれましたが、私自身もう一度、この礼拝堂は本当に主が備えて下さったと再確認させられました。玄関の定礎板に「ヤーウェ・イルエ＝主は備えてくださる」と刻まれています。これは北教会の愛唱聖句になっている御言葉です。もう一つ、先日、私がお阪西教会に導かれるきっかけになった大阪西教会の姉妹を訪ねました。この方がおられなければ、私がお阪西教会に行く事はありませんでした。もう60年も昔のことです。それやこれやを通して、本当に神様が全てを備えていて下さることを強く覚えました。

◆今日の聖書の箇所は、聖霊降臨節がありましたから使徒言行録をしばらく読みましたが、その前は、ヨハネ福音書が続けて読んでおりました。今日からまたその続きを読みます。今日は10章31節からですが、そこに「ユダヤ人たちはイエスを石で打ち殺そうとしてまた石を取り上げた」とあります。以前にもそういうことがありました。8章50節「イエスは言われた。『はっきり言っておく、アブラハムが生まれる前からわたしはある。』するとユダヤ人たちは石を取り上げ、イエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠し

て神殿の境内から出て行かれた。」そして9章で、生来の盲人をいやされる話があって、今日のところに来るわけです。10章でイエス様はこうっておられます。11節「わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のためにいのちを捨てる。」これはイエス様ご自身のみ言葉です。この言葉を聞けば、詩篇23篇を想起しないユダヤ人は1人たりともおりません。「神様がわたしたちの羊飼いなのだ。」これはユダヤ人達の生活に密着した信仰なのです。ところがここでイエス様は「わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」と言われます。この御言葉は私たちキリスト者にとっては、有難い、真実な御言葉です。私達の羊飼いであって下さるイエス様は本当に良い羊飼いで、我々如き者のために命を捨てて下さる御方です。本当にわたしたちは慰めを覚えます。ところがユダヤ人たちは、これが許しがたい神冒瀆の言葉に聞こえるわけです。「我々にとって羊飼いは、しかも良い羊飼いは神様以外にいない」というのがユダヤ人の確信です。それはわたしたちにとってもそうです。「神様は良い羊飼いです、そして良い羊飼いは羊のために命を捨てて下さる。」

◆そして今日の31節の直前の、10章30節において、「わたしと父とは一つである」と主・イエスは言われます。「アブラハムが生まれる前からわたしはある。」この「わたしはある」という表現は、神様の自称なのです。神様は「わたしはある」というお名前なのです。「どのような時にも、わたしはいる。わたしはあなたとともにいる」というのが神様のお名前です。イエス様は「ユダヤ人の先祖であるアブラハムよりも前にわたしはいた」と言われ、今日の直前の箇所、「わたしと父とは一つである」と言われます。これらの言葉を聞けば、ユダヤ人たちはこれを放任することはできません。もう限界です。彼らは、「イエスを石で打ち殺そうとしてまた石を取り上げた」のです。神を冒瀆する者がいれば、皆で、石で打ち殺さねばならないと、旧約聖書に明記されています。レビ記24章15節16節にこうあります。「24:15 あなたはイスラエルの人々に告げなさい。神を冒瀆する者はだれでも、その罪を負う。24:16 主の御名を呪う者は死刑に処せられる。共同体全体が彼を石で打ち殺す。神の御名を呪うならば、寄留する者も土地に生まれた者も同じく、死刑に処せられる。24:17 人を打ち殺した者はだれであっても、必ず死刑に処せられる。」

◆32以下にこのようにあります。「イエスは言われた。『わたしは、父が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中のどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。』ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒瀆したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ。」ユダヤ人たちは主イエス様の善い業を否定しようもありません。しかし「わたしと父は一つである。」「アブラハムの生れる前からわたしはいる」「わたしは良い羊飼いです」等々。わたしたちキリスト者にとっては納得のいく御言葉ですが、ユダヤ人はこれらを聞けば、怒りで震え上がるような言葉です。

◆それで、ヤハウエのみが神であることはイエス様が一番ご存じで、それを否定されることはありません。ところがユダヤ人たちが今まで教えられ、実体験としても知ってきた唯一の救い主なるヤハウエ、これが現ユダヤ教の信仰です。しかしその御方が人となって、羊のために命を捨てて下さる神様であられるということは、私たちイエス様を通して神様の憐みがない、限界がない。一切の災いとか障害を超えて、神様は本当に私たちを愛し抜いてわたしたちのために身を犠牲にして下さる。惜しまず全てを捧げて下さるということは、わたしたちはイエス様に出会い、イエス様に捕えられ、わたしたちクリスチャンの信

仰の確信です。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」このイエス様のお言葉は永遠に崩れることはありません。今日の箇所でも主イエスご自身が、「聖書が廃れることはありません」と言っておられます。私達は、主なるヤハウェの御言葉も、主イエス様の御言葉も決して崩れないと信じております。

◆私たちはその神様が、そのイエス様が、聖なる御霊として私達の内に降り給い、現に私達の内にあって生きておられることを経験しております。イエス様は「わたしと父とは一つである」と言われます。これを聞いたユダヤ人たちは、怒りで震え上がったのですが、私たちクリスチャンは、イエス様と神様は一つであられ、そのイエス様とわたしたちは一つであること、イエス様がわたしの内に御霊として、私たちを生かし、支え、働いておられるということを信じております。ですから、私とイエス様は一つです。御霊はわたしの内で生きて働いておられます。これはクリスチャンの信仰の基本ですね。ですから、ユダヤ人がユダヤ教の内部で言うことは、それなりに理解できます。そして、この一線を越えて、「ヤハウェとイエスは一つである」という事を信じるのは人間業ではできないことです。◆神様ご自身がその人間を直撃して、それまでの理解を根底から覆す。それを経験したのが使徒パウロです。彼はユダヤ教の熱心な代表的な人物でしたが、そのパウロが悔い改めて、回心したのです。復活の主イエス様が彼に臨み、彼を打ち倒したのです。そのような経験がクリスチャンの経験です。イエス様は、38年間も病気で苦しんでいた人を立ち上げらせ給いました。然しその日が「安息日」だったので、ユダヤ教徒からすれば、「掟破り」ということになるのです。「掟」を尊ぶ熱心さはさすがだとしても、その熱心は深い知識に基づいていないのです。洗礼者ヨハネは語る人であり、預言者であったけれども、何一つしるしは行わなかったのですが、イエス様は様々なしるし、つまり奇跡を行われました。そして「奇跡」は神様の御業なのです

◆ですから、ここで、イエス様を石で打ち殺そうとする彼らも、主イエス様の善い業は否定しない。できない。自分を神と同一視する、「神冒瀆」が許せないのです。イエス様は「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」と言われました。イエス様のなされる善い業は、このお気持ちで、対面される人々に誠心誠意お仕えになる所に生起するものです。それこそ神様御自身の全存在の施与、全賜物の施与です。「主なる神は善なる御方、全てを善とし給う御方」(詩篇 119・68)。私たちは、神様の憐みによって、神の子とされています。ですから私たちは永遠に神様と一つなのです。ですから神様から頂く祝福、幸いは、無比で、無限です。いよいよこのことを感謝し、それこそ「主はわが牧者なり、われ乏しきことあらじ」との信仰を、すべての人と共有し、イエス様と一つなので、身を惜しまず与えられた賜物を捧げ尽くして平和のために働きたいと思えます。

◆お祈りいたします

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。

私達は本当に弱く愚かな者です。けれども、あなたは私達を顧みて、常に共に歩いて下さって、私達が力尽きて歩むことができない時には、あなたは私たちを負ってください。そのような身とされていることをわたしたちは愚かにも忘れ去ってしまう者ではありますが、今新たにそのことを覚え、心から感謝いたします。どうかこれからの日々、あなたと一体である者としてあなたのみ名を辱めることなく、御名の栄光が現われますように、仕え、働く者として下さい。この祈り主の御名を通しみ前にお捧げいたします。アーメン。